

相互行為におけるアイデンティティの管理： 語られるアイデンティティと演じられるアイデンティティの分析

The management of identity in interaction: An analysis of narrated identity and enacted identity

ミラー成三(千葉大学, 人文社会科学研究科)

Seizo MILLER(Chiba University,
Graduate School of Humanities and Social Sciences)

Abstract

Being in a multicultural environment or having intercultural interactions will affect how one's identities are constructed or changed. It is important to understand about ones identity when we study about language education or multicultural societies. It is equally important to know how people indicate their identities during interactions, although there have not yet been many studies that analyzing this.

This paper conceptualizes *identity* as a plural and unsettled object, and it focuses on how foreign people in Japan indicate their identities during interactions. Two kinds of identities will be analyzed in this study. Narrated identities will be analyzed using the interview data, while enacted identities will be analyzed using the conversational data. It will be clarified that people manage their identities when they indicate them during interactions by hiding, actualizing, or "enacting" their identities.

1. はじめに

多文化の環境に身を置くことや、文化間の移動などによる異文化接触は、成長過程におけるアイデンティティ形成に大きく影響するとされている(丸井 2012)。これは成人してからのアイデンティティ変化にも大きな影響を与えると考えられ、それらを知ることは言語教育や多文化社会を考える上では欠かすことができない。一方でそのアイデンティティを、相互行為を通してどのように表示しているのかも、アイデンティティを分析する上では重要になってくる。しかし、このようなアイデンティティの表示に関わる研究は多く見られない。

本稿ではアイデンティティを複数あり、流動的なものとして扱っており、相互行為を通してどのようにアイデンティティを表示しているのかに研究の焦点をあてている。本稿では日本に長期滞在する外国人を対象に、インタビューのデータを用いた「語られるアイデンティティ」と、談話録音のデータを用いた「演じられるアイデンティティ」の分析を行った。その結果相互行為を通してアイデンティティを表示する際に、行為者はそのアイデンティティを管理しながら表示していることが明らかになった。すなわち、行為者は自身のアイデンティティを潜在化、顕在化、そして時には『演じて』表示しているのである。

2. 先行研究と研究目的

アイデンティティとは、Erickson(1950, 1959)によって提唱された概念である。従来心理学の分野において複数のアイデンティティという考え方はあまり一般的ではなかった(末田 2012)一方で、社会学や第2言語習得の分野においては、アイデンティティは複数のものとして捉えられることが増えてきている(Norton2000, Pavlenko 他 2001 など)。特に Tajfel(1978, 1981)や Turner(1981, 1987)によって社会的アイデンティティ理論や自己カテゴリー化理論が提唱されてからは盛んに研究が行われるようになってきた。このような研究では、アイデンティティの可変性により、場においてそこに参加する者がどのようなアイデンティティを構築しているかを知ることが重要であるとされている(池田 2007)。

従来のアイデンティティ研究では、インタビューのデータを使用したナラティブ分析(Norton2000, De Fina2003)、ライフストーリー研究法(桜井 2002)、また会話分析的手法を用いた分析が行われることが多かった。しかし Cross(2010)はインタビューと実際の行動を結びつけて分析することの重要性を指摘している。北出(2013)は「アイデンティティは自己の理想部分と現実を切り離すことは難しく、インタビューや内省データで捉えた内容は実際の行動で示されるアイデンティティや他者から見たものと異なる可能性がある」(pp.290)と指摘しており、インタビューなどによるデータだけでは「語られるアイデンティティ(narrated identity)」を分析することができても、「演じられるアイデンティティ(enacted identity)」を分析することは困難であると述べている。また Norton & McKinney(2011)は今までのアイデンティティ研究はナラティブが主流であったが、今後は多様なデータを用いたフィールドワーク的研究に期待がかけるとしている。

アイデンティティの管理とは、すなわちどのアイデンティティをどのように表示するかということである。Neustupný(1994)は言語問題を言語そのもののみではなく、個人がどのように自分の意図や態度を伝達しているか、また自己をどのように表示するかにも注意を向けるべきであると指摘している。この言語管理の一環としての自己表出の管理(presentational management, pp.61-64)では、発音やイントネーション、使用する表現に対する管理が指摘されており、本稿におけるアイデンティティの管理もこの自己表出の管理と同様に扱うことができるだろう。

アイデンティティの管理に関する研究の一つに Goffman(1963, 石黒訳 2001)がある。Goffmanは他者からの社会的な信頼を失わせる属性としてのスティグマが日常のコミュニケーションの中でどのように貼り付けられていくのかを分析する過程で、自我アイデンティティ、社会的アイデンティティ(対他的な社会的アイデンティティ(virtual social identity)と即時的な社会的アイデンティティ(actual social identity)), 個人的アイデンティティという3つのアイデンティティを想定した。そしてスティグマに対処する方法としてカヴァリングやパッシングなどを行って自身のアイデンティティを意識的に管理していることを指摘している。

以上のことを踏まえて、本稿ではインタビューによって得られる内省的なアイデンティティを「語られるアイデンティティ」、談話録音で表示または受け入れられるアイデンティティを「演じられるアイデンティティ」とし、「語られるアイデンティティ」と「演じられるアイデンティティ」の両面から、行為者が相互行為を通して表示されるアイデンティティについて多角的な分析を行う。そして行為者が自分のアイデンティティを意識的、無意識的に選択しながら表示している、もしくは隠していること、また時にはアイデンティティを『演じて』表示していること、すなわちアイデンティティを管理しながら表示していることを指摘する。

3. 調査概要

3.1 調査協力者

異文化との接触はアイデンティティに影響を及ぼすと考えられるが、短期滞在の予定で来日している者に関してはそれほど変化がおきないと予想される。このことから、本研究では日本に長期滞在する外国人を対象に調査を行った。なお長期滞在のビザは 2012 より最長期間が 5 年と設定された¹ことをふまえ、今回は 5 年以上日本に滞在しているものを対象とした。現在のところ調査者の知人でもある 2 名の協力者からデータを得ることができた。それぞれの協力者のプロフィールは以下の通りである。

(1)KF1 のプロフィール

KF1 は 20 代の韓国人女性であり、現在日本の大学院前期課程に所属している留学生である。使用言語は韓国語、日本語、英語である。小学校時代に母親のすすめで日本語の勉強を始め、以降独学で勉強を重ねていった。学部生時代に日本に交換留学に訪れ 1 年間滞在した後、カナダに 1 カ月間語学留学している。その後韓国に帰国し学部を卒業したのち、研究生として再び来日している。その後大学院に進学し、現在も大学院生として日本で生活している。滞日期間は計 5 年程度であり、日本語能力は上級、もしくは超上級である。

(2)KF2 のプロフィール

KF2 は 30 代の韓国人女性であり、現在語学学校で講師をしている。韓国で大学を卒業後、かねてから学んでおり興味があったという日本語に関する研究を行うため来日し大学院に入学した。大学院前期過程を卒業後、同大学の後期課程に進学し研究を続けた。KF2 は後期課程に在学中から語学学校の講師として働いており、修了してからも同語学学校で講師を続けている。滞日歴はおよそ 11 年であり、日本語能力は上級、もしくは超上級である。

3.2 調査の手順

本調査は、語られるアイデンティティと演じられるアイデンティティの両面を調査するために、インタビューと談話録音という 2 つのデータを収集した。インタビューでは Kuhn & McPartland (1967) の The Who Am I test (以下 WAI) を援用し、調査協力者に「わたしは〇〇です」という文を提示し、〇〇に入るものを 5 つ程度挙げてもらった。さらに、挙げてもらったものの中で自分と最も結びついているものを選択してもらい、そのアイデンティティが形成される過程を中心にライフストーリーを語ってもらった。インタビューの長さはそれぞれおよそ 90 分程度である。

談話録音はその後一週間以内に行った。談話録音は、日本人(JF1, JM2)との初対面接触場面を設定して行った。内容は制限せず自由に会話をしてもらい、それを IC レコーダーによって録音した。録音時間はそれぞれおよそ 30 分であった。また談話録音終了後一週間以内に、協力者には自身のアイデンティティの表示などに対する意識に関するフォローアップ・インタビュー (ファン 2002, 以下; FUI) を、また JF1 には他者へのアイデンティティの評価を得る目的で、協力者のアイデンティティや自身の内省についてインタビューを行った。FUI では再生刺激として音声やその文字化資料を協力者に見せながら行った。

本研究では語られるアイデンティティを分析するためにインタビューのデータを、演じられ

るアイデンティティを分析するために談話録音のデータを使用し、さらに FUI による当事者の意識を交えながら分析を進めていくこととする。

4. インタビューによる「語られるアイデンティティ」の分析

はじめに、インタビューによって得られた「語られるアイデンティティ」の分析を行う。インタビューではまず初めに WAI を援用し、協力者に「わたしは〇〇である。」という文を提示し、自分の〇〇にあてはまる語句を五つ程度提示してもらった。さらに提示した語の中から最も自分と結びついていると思うものを一つ選択してもらった。協力者が提示した語は以下の表 2 の通りである。なお最も結びついているとしたものに※印を付してある。

表 1：WAI によるカテゴリー

	1	2	3	4	5	6
KF1	人間	韓国人	※学生	女性	外国人	A 型
KF2	※韓国人	教師	女性	人間	△△ (名前)	

4. 1 KF1 のインタビュー分析

KF1 が WAI で提示したものは「人間、韓国人、学生、女性、外国人、A 型」であった。また、最も自分と結びついているものとして「学生」を選択した。インタビューではこの「学生」というアイデンティティが本人と強く結び付くようになった過程を中心に聞いていった。インタビューの中では主に韓国在任期、第 1 次来日期、語学留学期、第 2 次来日期、現在の五つの時期が語られた。本項では特にアイデンティティ形成に関わりが深かった第 1 次来日期、第 2 次来日期、そして現在を取り上げて分析を行うこととする。

(1) 第 1 次来日期

KF1 は学部生時代に交換留学生として日本に来日している。当時は留学にきたという意識を強く持っており、他の韓国人よりも日本人と交流をもとうと意識していた。しかし、当時はあまり日本人と仲良くできていなかったと感じていた。また当時同じ大学に留学に来ていた友人の、ある日本人学生に「自分と話したかったら次からは電子辞書を持ってきて」と言われたという苦い経験を聞き、「外国人」に接する時の態度の違いを感じていた。このような「外国人」に対する態度の違いを感じた KF1 は、自身が日本人と仲良くなりきれない原因が自らにあったと感じていた。そして日本人と仲良くするために自身が日本人に近づくべきであり、日本人のようになりたいと思うようになっていたという(例 1)。

例 1

“そのときは、まあ日本語も今よりできなかったから、まあ日本語もへただし、もっともっとがんばって日本人みたいになりたいっていうのはありましたね。そしたらもっとみんなと仲良くなれるかもしれないし、うん。とってた。”

このような外国人としての意識が見える一方で、別のアイデンティティも意識し始めていた

時期でもあった。KF1は当時から、将来はやりたいことをやりたいと考えており、それを見つけるために様々なことを経験しようと考えていた。そして様々な経験をした結果、研究が“適性にあう”と感じ大学院への進学を決意したという。

このように、KF1は交換留学時代に外国人としての意識を強める一方で、大学院の進学を決意するなど学生としての意識が強くなってきていることが分かる。特に大学院への進学はKF1の今後の人生に関わることであり、KF1のアイデンティティにも大きな変化が表れはじめたと言えるだろう。

(2)第2次来日期

KF1は交換留学終了後、カナダに語学留学に向かっている。これはKF1が大学院留学する先を決定するためでもあったという。最終的に韓国で大学を卒業後日本への大学院留学を決意し再び来日した。KF1は学生であるという意識を持つ一方で、来日してからも交換留学時代と同様にできるだけ日本人に近づこうという意識を持っていた。しかし、この時期に方針を大きく転換することになる。すなわち日本人のようになることをやめて、別の方針をとっていくことを決めたということである。KF1によると、この方針の転換には大きなきっかけはなかったという。しかし日々の生活の中で、日本人が外国人である自分に接する時の態度の違いを感じていた。それは例えばボランティアに参加した時に感じたものであったり、レストランでの店員とのやり取りの中で感じる小さなことの積み重ねによるものであった。KF1はこの転換のきっかけについて以下のように語っている(例2)。

例2

“途中で、いくら努力しても、できないっていうことが分かったんですね。だから、もうそれは諦めて、まあ自分が楽、なように暮らしていけば、いいかな。” “きっかけは、あーどうかな。なんかそこまで差別とかされたりはしてないんですけど、なんか、こう大きいきっかけはないけど、生活で、なんか感じるんですね。”

すなわちKF1は、自分の努力だけでは日々の生活の中で周りの日本人から貼り付けられる「外国人」というアイデンティティと自分の意識するアイデンティティとを一致させられないと考え、それまで重要視していた「日本人らしさ」を放棄し他のアイデンティティに思い入れを持つようになったということである。KF1もインタビューの中でこれを認めており、ここから別のアイデンティティとしての意識が強化されていったことが分かる。

(3)現在

現在のKF1はWAIでも選択していた通り「学生」としての意識が強い一方で、日々の生活の中では他のアイデンティティが顕在化することもあるという。韓国人の友人や家族と接触する時は韓国人としてのアイデンティティが顕在化することもあるれば、例7のように日本人と接触する時は(他者からのラベリングによって)「外国人」という意識が強まることもある。しかしKF1自身は“自分の仕事は勉強”であると語っており、普段の生活は学校にいるか家にいることが多いと認めている。そのため他者から「学生」として評価されることが多くなる。すなわちKF1の意識と他者からの意識が一致し、「学生」という意識が強まっていると予想される。

インタビューで語られた KF1 のアイデンティティ変化は、次のようにあらわすことができるだろう。第 1 次来日期には「日本人」らしさや「学生」という意識が強まり、様々なアイデンティティを持っていた。しかし第 2 次来日期の転機から、「日本人」らしさという意識が薄れ、KF1 の生活の基盤であった学校という環境で他者から受ける評価と一致した「学生」という意識が強まっていった。現在もこの「学生」という意識が強いが、場面や相互行為の相手によって違うアイデンティティを顕在化させているようである。

4. 2 KF2 のインタビュー分析

KF2 が WAI で提示したものは「韓国人、教師、女性、人間、自分の名前」であった。そのなかで最も自分と結びついているものとして「韓国人」を選択した。KF2 のインタビューでは主に韓国在住期、留学期前半、留学期後半、現在の 4 つの時期が語られた。ここでは留学期前半、留学期後半、現在の 3 つの時期について分析を行っていくこととする。

(1)留学期前半

KF2 は韓国で大学を卒業後、かねてから学んでおり興味があったという日本語の研究をするために日本の大学院に留学を決意し来日した。来日当初はできるだけ日本人に近づこうとし、韓国人であることをできるだけ隠していたという(例 3)。

例 3

“その時は一、日本人のようになりたいと思ってましたねー、はい。できるだけ日本人の友達が欲しいと思ってましたので、はい。あのー韓国の人よりは日本人と交流しようと思ってましたし?、自分が韓国人というのも必要でなければ言わないようにしてたと思いますね、はい。”

これは KF2 が当時から“日本語も問題なく”使用することができ、日本人の友人も数多くいたと語っているように、KF2 の日本語能力の高さによって可能となっていたことがうかがえる。また KF2 によると、この「日本人」のようになりたいという KF2 の意識は、周りの日本人によっても同様の評価を得ていたようである。

このように KF2 の留学期前半は KF2 の「日本人」のようになりたいという意識と、周りの日本人からの「日本人」のようだという評価が一致し、アイデンティティがうまく保持されている状態だったと言えるだろう。

(2)留学期後半

ところが KF2 が博士後期課程に進学してから、この意識に変化が起きる。そこまでは「日本人」のようになるという意識を持っていた KF2 だが、数年間日本で生活するうちに自身の「韓国人」らしさが薄れていくのを感じていたという。そんな中、KF2 は友人に言われたことがきっかけとなり、自身のアイデンティティを変化させていくことになる。KF2 はそのことについて以下のように語っている(例 4)。

例 4

“そのぐらいの頃だったと。そしたら久しぶりに友達と、あつて?韓国人の。その時にすごい日本人っぽく

なったねーって言われて?、はい。言語だけじゃなくて、仕草とかそういうことだと思うんですけど、はい。それが、なんか、とてもショックでー。”

KF2はこの友人との会話のあと、自らの言語だけではなく仕草や行動なども日本人に近づいていることにショックを受けたという。そしてそれまでの意識を改め、自分の「韓国人」らしさを取り戻すために、「韓国人」らしさを前面に出すように心掛けるようになったという。また韓国人の友人とも以前より積極的に交流するようになり、この頃に仲良くなった韓国人の友人に紹介してもらい語学学校の講師の仕事をしている。語学学校での仕事を始めてからは韓国語が以前のように話せるようになったと言い、「韓国人」としてのアイデンティティと、韓国語の「教師」という新たなアイデンティティを意識するようになっている(例5)。

例5

“今の一学校で教師を始めてからは、自分の韓国語、が戻って行くような?感じがして、とても、あーよかったです、はい。”「生徒のみんなはー自分を韓国人として見てくれる?ので、当たり前なんですけどーhh.先生としても頑張らないとーと思いました。”

このように、留学期後半の時期はKF2にとっては「日本人」らしくなりたいという意識から「韓国人」らしさを取り戻すことを意識し始めた時期であった。特にこの語学学校の講師という仕事は、自身の「韓国人」のアイデンティティを強めることに大きな働きをしていたようである。

(3)現在

KF2はWAIで「韓国人」を最も自分と結びついているとしたように、「韓国人」としての意識が強いようである。またKF2は現在大学院を修了してからも同語学学校の講師を続けているため、「教師」としてのアイデンティティも意識しているようである。KF2の「韓国人」や「教師」としてのアイデンティティは(例5)にあるように現在の語学学校で生徒達などからうけるアイデンティティの評価と一致していることから強まっていると予想できる。一方でKF2は現在語学学校における接触がほとんどであるとしており、それ以外の場所ではどうかはあまり意識したことがないから分からないと語っている。

インタビューで語られたKF2のアイデンティティの変化は、次のようにあらわすことができるだろう。留学期前半は「日本人」のようになりたいと意識していたKF2は、周りの日本人からも「日本人」のようであるという評価を受けていた。しかし、自分の「韓国人」らしさが薄れていると感じていた時期に友人からより「日本人」に近づいたと評価され、アイデンティティの転換をすることになる。「韓国人」らしくなろうと決意してからは、韓国人との交流も増え、語学学校で講師の仕事も始めた。そこからは語学学校の生徒などから「韓国人」や「教師」としての評価をうけ、自身のアイデンティティを保持している。

5. 談話録音による「演じられるアイデンティティ」の分析

談話録音は、KF1-JF1, KF2-JM2 という初対面の相手と1対1のペアを組み行われた。JF1とJM2はいずれも調査者の知人であり、調査者はそれぞれの共通の友人という立場である。ま

た KF1 と JF1 は同じ大学に通っている。会話の内容に制限はなく、30 分程度自由に会話してもらい、その様子を IC レコーダーで録音した。また談話録音終了後、一週間以内に FUI を行った。本項では談話録音のデータと FUI のデータを用いて分析を行う。

5. 1 KF1 の演じられるアイデンティティ

KF1 と JF1 の談話では多くのアイデンティティは表示されず、お互い「学生」のアイデンティティを最後まで保持しながら会話が進んでいった。ここではその要因について分析を行っていく。以下の例は KF1 と JF1 の会話の開始部である。

会話例 1: 「学生」アイデンティティの表示

- 1 KF1 はい。はい。大丈夫ですか、椅子
- 2 JF1 あ、だ、大丈夫です、全然。何をしてるんでしょうね、これ
- 3 KF1 うん。なんか研究の関係でいろいろ聞きたいことがあってみたいな
- 4 JF1 ああ、はあ、はあ、はあ
- 5 KF1 (調査者)さんの、あの、サ
- 6 JF1 あの、サークルの後輩です
- 7 KF1 ああ、ああ、ああ、ああ、ああ。サークル、あれです、バンドです
- 8 JF1 ああ、そうです、そうです
- 9 KF1 へえ。どんな楽器ですか
- 10 JF1 私は、あの、ベースとかキーボードとかを
ちょこちょこやっている感じで
- 11 KF1 ふーん
- 12 JF1 学科の方ですか
- 13 KF1 ああ、私は院の、修士 2 年生で
- 14 JF1 ああ、M2 なんですね
- 15 KF1 はい
- 16 JF1 国際でしたっけ、ここ
- 17 KF1 あ、国際ですね、はい
- 18 JF1 国際ですか
- 19 KF1 はい
- 20 JF1 私も今 M1 で
- 21 KF1 ああ、ああ、ああ、え、専攻
- 22 JF1 専攻は心理学です

13 行目で KF1 が修士の 2 年生であることを表示し、それに対して JF1 も 20 行目で修士の 1 年生であることを表示している。12 行目までで JF1 が調査者と同じサークルに所属していたことなどが表示されているものの、お互いが学生であることを認識してからは会話の終了までお互い「学生」というアイデンティティを保持し、他のアイデンティティの表示はされなかった。KF1 は FUI で、自身ができるだけ自分の「韓国人」のアイデンティティを表示しないようにすると述べており(例 6)、これが一つの要因となっていることが考えられる。

例 6

“相手から、出身どこですか?とか韓国人ですか?とか、聞かれたら話すんですけど。聞かれたりして言わなきゃ嘘になる場合じゃなければ、あんまり言わない。(中略)言わないというか、極力避けてる”

KF1 は極力自分の「韓国人」というアイデンティティを表示しないようにしているということは、FUI でも KF1 自身が自己紹介を制限していたと語っているように、「学生」であることは開示するもののその他の自己開示をしていないということからも言えるだろう。

また、この KF1 と JF1 の会話は最後までお互い名乗ることがなく会話が終了している。KF1 は普段から相手が「韓国人相手だと名乗る」ものの、相手が日本人の場合は自分から名乗ることをしないという。すなわち、この会話の開始部では KF1 は「韓国人」というアイデンティティをできるだけ潜在化させるという方針をとっているために、名前を名乗ることを回避したり、自己紹介を制限し「学生」を表示したりしているということになる。

一方で KF1 は FUI で、会話の途中途中でも「韓国人」であることを表示するチャンスはあったと述べている。以下の(会話例 2)はその一つである。

会話例 2: 「韓国人」表示の機会

- 1 JF1 結構、私の 1 個上の先輩も辞めた先輩多かったですよ
- 2 KF1 ああ
- 3 JF1 1 年、2 年ぐらいして、
- 4 KF1 うん
- 5 JF1 辞めちゃった先輩が 5、6 人いたかな、
20 人ぐらいいる、そのグループに、辞めちゃって、
- 6 KF1 辞めたらまた就活しなきゃいけないんですよ
- 7 JF1 そうですね。結構、辞めた人だと公務員目指す人が多かったんですね
- 8 KF1 ああ

これは JF1 が就職活動をする予定であるという話しをしている場面である。7 行目で JF1 は自分の先輩の中には一度就職した会社を退職し、公務員を目指す人が多いということを語っている。KF1 はこのことに対して韓国でも同じ実情があることを知っており、話題を展開させここで表示するべきか悩んだという。しかし、最終的には「韓国人」であることを潜在化ⁱⁱさせることを選択肢し、ここでそのことを言及することはしなかった。

相手が開始した話題の展開を制限する一方、FUI で KF1 は、自分から開始する話題についても意識して制限をかけていたと述べている(例 7)。

例 7

“私外国人って、知ってるかなって。でもし知らないなら、知らないままで、終わったらいいかなって。(中略)あと、関係のない質問とか、ばっかりする。国籍とかじゃなくて、専攻とか勉強してることとかだと、そういう自分の話ししなくていいじゃないですか。”

このように、KF1は会話中を通して、自己紹介や話題の制限、話題展開の制限などを行うことによって自分の「韓国人」というアイデンティティを潜在化させていた。結果として、初めに表示した「学生」というアイデンティティを保持したまま会話を続けていくという結果になった。このようなアイデンティティを隠すような行為はGoffmanが述べるパッシングに近い行為であると言えるだろうⁱⁱⁱ。

一方で会話の相手となったJF1は、会話の端々ではKF1が韓国人なのかもしれないという意識を持ちつつも、“女性ということと院生であることくらいしか(分からなかった)”と語っている。また、この場면을接触場面としては捉えておらず、“日本人と会話する時の会話”であったと述べており、KF1の「韓国人」というアイデンティティを潜在化は比較的うまくいっていたと言えるだろう。

5. 2 KF2 の演じられるアイデンティティ

KF1 の談話では「学生」のアイデンティティが保持されたまま会話がされたのに対して、KF2-JM2 の会話では様々なアイデンティティの表示が見られた。以下の会話例 4 は KF2 と JM2 の会話の冒頭である。

会話例 4：会話の開始

- 1 JM2 えーと、初めまして h
- 2 KF2 初めまして hh
- 3 JM2 私は○○(名前)です。
- 4 KF2 △△(名前)です
- 5 JM2 え、と
- 6 KF2 △△(名前)、韓国人なんです
- 7 JM2 え、そうなんですか?、すごい、日本語上手ですね h
- 8 KF2 そうですか?h、もう 10 年くらい?、10 年以上日本にいますので h、はい。
- 9 JM2 あーそうなんですか
- 10 KF2 はい、今は韓国語学校で?、韓国語を教えています
- 11 JM2 ああーああー、あの一、[地名 1] とかですか?h
- 12 KF2 いえ [地名 2] です h. 多いですけど [地名 1] . お仕事は、されていますか?

この例では KF2 と JM2 が自己紹介を行っている。3 行目では JM2 が名前を名乗っており、それに返答する形で、4 行目で KF2 が名前を名乗っている。しかし、JF1 はその名前を聞き取ることが出来ず 6 行目で再び言い直しており、さらに“韓国人なんです”と追加の情報を述べている。FUI で KF2 は“韓国人であると言った方が名前が分かると思ったので”と述べており、相手が自分の名前を聞き取れなかった場合に頻繁に行うことであると語っている。さらに 10 行目では“今は韓国語学校で、韓国語を教えています”と述べており、自分が語学学校の「教師」であると明かしている。すなわち会話の冒頭のこの 12 行目までで、「韓国人」と「教師」というアイデンティティを表示しているのである。

このように WAI で表示したアイデンティティをここでも表示する一方で、自分の好きなこと

など他のアイデンティティを表示することもあった(会話例 5).

会話例 5 : 写真が好き

- 1 JM2 あ、あの一 [会社名] っていう、会社なんですけど
- 2 KF2 あ、そうですか
- 3 JM2 はい、あの一、カメラとか?作ってる会社なんですよ
- 4 KF2 カメラですか?, いいですね h, 写真とか好きですよ
- 5 JM2 あ、ほんとですか?hh, とりに、行ったり
- 6 KF2 いや、見るだけなんですけど hh, はい
- 7 JM2 そうですか hh, あの一もし買うなら、ぜひ、[会社名] を hh
- 8 KF2 hh そうですね
- 9 JM2 僕もあの一、カメラ好きで、たまにとりに行ったりするんですよー

これは会話例 4 の続きであり、JM2 が自分の仕事の話をしている場面である。1 行目では会社の名前を、3 行目ではそれがカメラを作っている会社であることを明かしている。それに対して KF2 は 4 行目で自分は“写真とか好き”であることを明かしている。すなわち、趣味の領域を明かすことによって、「写真好き」であることを表示しているのである。9 行目では JM2 が自分も“カメラ好きであることを明かしており、二人の間に(厳密に言えば「写真好き」と「カメラ好き」だが)「カメラ好き」という共通のアイデンティティが構築されている。

KF2 は FUI で、本当は写真がそこまで好きではないと語っている。それにも関わらず写真が好きと言った理由には、KF2 の人接する時の方針が関わっている。KF2 は FUI でこの場面について次のように語っている(例 8)。

例 8

“本当は、写真とか別に好きじゃない hh. あもちろん嫌いなわけじゃないですけど、はい。”あの一JM2 さんが、カメラの会社?, で働いてると、言ってたので、はい。好きだといった方が、こう一、仲良くというか?, 近づきやすいかなって”

KF2 は共通の趣味や話題を出した方が相手との距離が縮まるとは考えており、親近感を得やすくするために行っているのである。ひどい嘘となるような場合は言わないとしながらも、KF2 はこのような方針を“結構、やる”という。すなわち、KF2 は相手に親近感をもってもらうためにアイデンティティをまさに『演じている』のである。このように、KF2 と JM2 の会話ではこのような趣味や人柄がアイデンティティをして表示される場面は多く見られ、それを『演じている』かどうかに関わらず、時には自分から表示することもあれば会話の相手から表示されたアイデンティティを受け入れる場面もあった。

KF2 の会話の相手であった JM2 は、自身が大学院の研究室に所属していたときに同じ研究室に所属する韓国人学生のマナーの悪さが印象に強く残っており、元々韓国人全体に対してあまりいいイメージを持っていなかった。実際に KF2 が韓国人であることを知ってから、JM2 は少し身構えていたという。しかし、「写真好き」という KF2 のアイデンティティの表示があつて

からは KF2 を「韓国人」ではなく「写真好きの人」として接することが出来るようになり、最終的に KF2 のことを“気持ちいい韓国人”と表現するほどにいい印象を持つまでになっていた。すなわち、KF2 が『演じた』「写真好き」であるというアイデンティティは、JM2 にとっては KF2 の真のアイデンティティとして評価され、KF2 の考えとは異なるものの、JM2 に親近感を持たせることに成功していたと言える。

一方で KF2 が『演じていた』アイデンティティは、インタビューには全く表れていない。KF2 が「写真好き」であるというアイデンティティを表示したのは JM2 がカメラの会社で働いており、JM2 に親近感を持ってもらうためであった。すなわちこのような『演じられる』アイデンティティは常に KF2 の中にあるものではなく、相互構築を通して作られるものであるということが出来るだろう。

6. 考察

6. 1. アイデンティティの管理

インタビュー・データによる「語られるアイデンティティ」と、談話録音のデータによる「演じられるアイデンティティ」を合わせて分析すると、KF1 と KF2 は自身のアイデンティティを様々に管理しながら演じていることが分かる。

KF1 は出来るだけ自身の「韓国人」というアイデンティティを潜在化することによって「学生」アイデンティティを顕在化させることに成功していた。しかし FUI で“韓国人には名乗る”と述べているように、韓国人にとの相互行為では「韓国人」のアイデンティティを顕在化させていることがうかがえる。すなわち、KF1 は場面や相互行為の相手によって、(嘘にならない範囲で)自身のどのアイデンティティを顕在化させ、どのアイデンティティを潜在化させるのかを管理しているのである。このようなアイデンティティの管理は KF1 が来日してから様々な相互行為を通して蓄積してきた経験からきているものであり、KF1 の基本的な方針となっている。

同様に KF2 も自身のアイデンティティを管理していると言えるだろう。「韓国人」であることを積極的に表示していくこともその一つである。一方で KF2 は相手に親近感を持たせるためにアイデンティティを『演じる』という管理も行っていた。これは Goffman(1963, 石黒訳 2001)指摘したスティグマとされた者がそれに対処するためにとる行動ではなく、むしろ自己呈示の際に行う印象操作(Goffman1959, 石黒訳 1974)に近いものであると言えるだろう。このような KF2 の管理によって表示されるアイデンティティは、常に KF2 の中にあるものではなく、相互行為を通して構築されるような性格を持っていると考えられる。

6. 2. 二つのアイデンティティ

近年社会学や第二言語習得の分野で一般的になりつつある複数のアイデンティティは構築主義的な立場に立っており、様々な状況に応じて自己のアイデンティティを構築、再構築して、実社会との関連性を作り直していると考えられている(根本 2010)。本稿 5 節において分析された「演じられるアイデンティティ」はまさにこれにあてはまる。

では 4 節で扱った「語られるアイデンティティ」とはどのようなものなのだろうか。インタビューには、桜井(2002)が「語りの「いま・ここ」を語り手とインタビュアー双方の主体が生き」(pp.31)していると指摘しているように語り手とインタビュアーが存在する。すなわち「語られるアイデンティティ」にも、語り手がインタビュアーに対して「演じる」という要素が必然

的に加わっているのである。そのように考えると、「語られるアイデンティティ」と「演じられるアイデンティティ」はどちらも、異なるアイデンティティの管理によって相互行為に表示された構築主義的なアイデンティティであるということができよう。

一方で、心理学の分野で指摘されてきたような「自己(自我)」の存在も無視することはできないだろう。今後の研究においては、このような心理学的な「自己(自我)」と構築主義的なアイデンティティ、さらにアイデンティティの管理の関心に焦点を当てていく必要があると考えられるが、本稿では2つのアイデンティティとアイデンティティの管理の存在を指摘するにとどめ、詳細な分析と検討は今後の課題としたい。

7. おわりに

本稿ではインタビューのデータを用いた「語られるアイデンティティ」と、談話録音のデータを用いた「演じられるアイデンティティ」の分析を行い、行為者が行っているアイデンティティの管理の存在を指摘した。相互行為を通してアイデンティティを表示する際に、行為者は様々な管理を行いアイデンティティを潜在化、顕在化、そして時には『演じている』のである。また「語られるアイデンティティ」と「演じられるアイデンティティ」はどちらも構築主義的なアイデンティティである指摘し、心理学的なアイデンティティと管理との間にある関係性を分析することが重要であると述べた。今後も研究を進め、この関係性を明らかにしていきたいと考える。

参考文献

- Cross, R. (2010). Language teaching as sociocultural activity: Rethinking language teacher practice. *The Modern Language Journal*. 94(3). pp. 434-452.
- De Fina, A. (2003). *Identity in Narrative: a Study of Immigrant Discourse*. Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Erikson, E.H. (1950). *Childhood and Society*. New York: Norton. (仁科弥生訳(1977-1980). 幼児期と社会 みすず書房.)
- (1959). *Identity and the life circle*. New York: W. W. Norton.
- ファン, S. K. (2002). 対象者の内省を調査する(1)フォローアップ・インタビュー J. V. ネウストプニー/宮崎里司(編) 言語研究の方法—言語学・日本語教育に携わる人のために くらしお出版 pp. 87-95
- Goffman, E. (1959). *The presentation of self in everyday life*. Garden city, New York: Doubleday(石黒毅訳 (1974). 行為と演技—日常生活における自己呈示— 誠心書房)
- (1963). *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall. (石黒毅訳 (2001). ステイグマの社会学:烙印を押されたアイデンティティ せりか書房)
- 池田佳子 (2007). 言語相互行為とアイデンティティ構築—第二言語教育への応用を考える— 言語と文化 Vol.8 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 pp.201-218
- 北出慶子 (2013). 相互文化グループ学習活動におけるアイデンティティ形成の学び, 言語文化教育研究, 11 pp.282-305 早稲田大学日本語教育研究センター言語文化教育研究会
- Kuhn, M. H. & McPartland, S. (1967). An empirical investigation of self- attitudes. In J. G. Manis & B.

- N. Meltzer (eds.). *Symbolic interaction*. pp.120-130. Boston: Allyn Bacon.
- 丸井ふみ子 (2012). アイデンティティ研究の動向：異文化接触・言語との関係を中心に 言語・地域文化研究(18) 東京外国語大学大学院 pp.193-209
- 根本浩行 (2012). 第二言語習得研究における社会文化的アプローチ 言語文化論叢(16) 金沢大学外国語研究センター pp.19-38
- Neustupný, J.V. (1994). Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. and Kwan-Terry, J. (ed.). *English and language planning: A Southeast Asian contribution*. pp.50-69. Singapore: Academic Press.
- Norton, B. (2000). *Identity and Language Learning: Gender, Ethnicity and Educational Change*. Essex, UK: Pearson Education Limited.
- Norton, B. & Mckinney, C. (2011). An identity approach to second language acquisition. In D. Atkinson (eds.). *Alternative approaches to second language acquisition*. pp.73-94. New York: Routledge.
- Pavlenko, A., Blackledge, A., Piller, I., & Teutsch-Dwyer (2001). *Multilingualism, second language learning, and gender*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 桜井厚 (2002). インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方 せりか書房
- 末田清子 (2012). 多面的アイデンティティの調整と面子(フェイス) ナカニシヤ出版
- Tajfel, H. (1978). *Differentiation between social groups: Studies in the social psychology of intergroup relations*. London: Academic Press.
- (1981). *Human groups and social categories*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Turner, J. C. (1982). The experimental social psychology of intergroup behavior. In J. C. Turner & H. Giles(eds.). *Intergroup behavior*. pp.66-101. Oxford: Basil Blackwell.
- (1987). A self categorization theory. In J. C. Turner, M. A. Hogg, P. J. Oaks, S. D. Reicher, & M. S. Wetherell (eds.). *Rediscovering the social group: A self categorizing theory*. pp.42-87. Oxford: Blackwell.

i 外務省ホームページ(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/visa/chouki/index.html>)

ii KF1 はここで「韓国人」というアイデンティティを意識しているが、それを表示していない。すなわち内在する意識をそのまま内にひめることを選択している。

iii ただしこのパッシングは仮想の社会的アイデンティティを維持することによってなされるため全く同じでないことには注意が必要である。